

講演「花粉化石から南四国の原風景を探る ― 最終氷期から現在までの植生と環境の変遷史 ―」

高知大学理学部 三宅 尚先生

花粉は、外壁がスポロポレーニンという物質を多量に含んでいて、酸化にとっても強く、化石として地層中に残存します。また、その数が非常に多いため、統計学的処理が可能です。

外壁の形態は種族によって異なり、同定が容易で、古植生、古環境の解明に有効です。

花粉は、硬い殻を持っているので、HF（フッ酸）やKOH（水酸化カリウム）で処理し、同定、分析を行います。

私は、南国市伊達野で20mのコアを採取し、最終間氷期から後氷期までの環境の復元を行いました。その結果、この期間を5段階に分けることができました。

① 間氷期（8～7万年前）	スギ、モミが卓越	やや冷涼湿潤。
② 氷期（前～中期 6～4万年前）	モミ、スギ、ツグが卓越	乾燥化が進行
③ 氷期（中期 3万年前）	温帯針葉樹の優先度が低下	寒冷乾燥化が進行
④ 氷期（後期 2万年前？）	ツガ、モミ、ミズナラ、ブナが卓越	寒冷乾燥化 草地化
⑤ 後氷期（1万年前）	カシ、シイに代わり、マツ増加 ソバ、イネ	人間活動の影響

特に、ソバの花粉がアカホヤ火山灰の下から出てきており、6,000年前から人間の活動が環境に与

えた影響が見られます。同じく、稲作が始まったのは3,200年前で、これは、弥生時代ではなく、縄文時代です。このように、花粉分析により、日本の歴史が大きく変わることがあります。